出多良目評判記

863
234

国立国会図書館　タイトル『出多良目評判記』 請求記号 863-234

ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『出多良目評判記』　請求記号 863-234

ガラス使用

863-234

出多良目評判記

全

国立国会図書館　タイトル『出多良目評判記』　請求記号 863-234

ガラス使用

863-234

国立国会図書館

口上

此所序文に整へ古気なし皇も恭しく此制言を發し
以見物様方へ木洞方なる口上を以て急に為申し上奉り
拝商評判記（もちト大なきだ也）ハ元々ゑ人におもえ共くら
為中ぐ出し出ならめ評れ書紀を爲と「見好志」振たり
いらせる所へ（きしで也）やれんとく遣ひ此「悪口」も中ゑハ九
生きんゆり拝ゞ為物語り同前ふつうまへ所なき様言に云と
しき出ならめ評れ悪口所ハ模に喰しなく「口見負」自に
見ゆるし下さるやう評者自ら出社ずつく口上を指に以笑
質を形ふにあん

物言盡聯合名題 大意

千里振神代の餘風燎焚民の竈も張ふて以代萬歳と飯食の熟典神
社の祭禮に古るめとも結る方のおすくめ更て取仕組物言盡乃聯合せ四
季に見立し一事目ハさんざめらすの朝幕の春物言の出うりとて花紙揃の
時代物の中幕に以て出しハ恰時候も笑芝居はもの為うらも俳優の尚り
を取し取作事を解與に見する祭りの出し物を見をつゝ紙に打續く事二
事目ハ孫更に秋の為のめの蔦の葉の紙を約枝に地そへて夕暮照らし挑灯の
火入の月の大仕械かんどう返しにかまり目ハ里大切の冬更にて役切
形の雪おろし雪明物の打出しと言に清ゝねて見功志のよし何し歳を
評判を神かけ形ふ宵宮の祭りにうる同ふ氏子の栄

夜諧恭平四辻催

志和のなる先は和ぬにはもいれ

四季眺望不盡賑

二十番續

聯合場割

第一番目に見立て　春和言の部

第一　工藤役屋對面の場

第二　吉原仲ノ町鞘尚の場

第三　三浦屋見世先の場

第四　芸原車引出合の場

第五　虎鷲影　色相肩　詠作変の場

第六　淺遠橋橋供養の場

第七　新條種富富吉愛の場

中幕に尚辺　笠和言の部

国立国会図書館　タイトル『出多良目評判記』　請求記号 863-234
ガラス使用

第八　彩政化(ぬえ)魯退治の場
第九　堀端丸橋生醉の場
第十　小堂道風蛙(悟)悟(蛙)の場
第十一　三河橋村菩薩別の場
第十二　菱祭泥(ド)土(ロ)仕合の場

二番目に見立し　秋物言の部

第十三　終森權八出合の場
第十四　一力屋奥座敷の場
第十五　葛ノ葉思慕子別の場

大切に見立し　冬物言の部

第十六　岩倉宗玄唐室の場
第十七　上杉奥座狐火の場
第十八　源左衛門住家の場
第十九　伏姫自害妖怪の場
第廿　山家屋見世先の場

附言

右に記ます評言ハ都て浜花ハ文字やれ口調に習ひしなれども此らぬ筆に書とし我所ハ以下ゆゑ下手此長談議と以来知りたるべし

国立国会図書館　タイトル『出多良目評判記』　請求記号 863-234
ガラス使用

巻頭　　平野屋丈

【頭取】曰く東西〳〵　此所巻頭に出しましたるは、高砂の芸の役者以つて評判
の好みは平野屋丈ぐらゐ稀【わるもの】き待兼ましたぞイヨ二十八歳
頭屋ヨット平野屋の突出しでむし【娘さん】頭取さんたのもしいめ
て下さいよ【頭取】此通り此人気ぐらゐ稀代出ししまつた。一番目春
の郭の曾我東山の場ぐらゐ稀の道具の好きな附弟たんぽぽ
ちまつて遣り出し給へさつさとよ梅王桜丸よ見立たるがかんざしらつ
くしく娘さんも大変しまうよ舞台を東に見たてしもチヨツトよし
文長え此傘を踊つてもよいや附しい丁度くしろ舟あそびをうけ松王が出て
まりさてユリやかや松王が引かるる此事止まらぬるさから笑ふて見るよ

キツト見れたと云ふ様な見ましたぞ【悪口】上手附し松葉のうんざりしは
ちとなどいやなぐらゐ見でいは松王が二人居るやうな【頭取】志かし何
の評のとうか云ふおの器量いふ芸やうすいは此丈の御家物之【達して】
名代ある芸者様の時代物といへば顔見世をさして以つてのほね
【理屈者】コレ〳〵此菅原などは時代物でいかにもどふか王代物ぐさそうも　狂言
の世界は四ツに分て見れば〳〵まつ第一を王代物といふ禁中公卿部て
貴上方の事をつまり第二を時代物といふ小條足利部て武将歴代の
事を云ふ第三を御家物と【頭取】東西〳〵　在判は丹後はつまり長息
故て芸評などは御有るところ無用の弁まつ此場は上評の方
まて以仕合〳〵　二役目二番目曽我の郭で浄る森権八出合の場見え文

国立国会図書館　タイトル『出多良目評判記』　請求記号 863-234
ガラス使用

都見いるの山家の道具の好き見附と大沢辺にて往ふり拂て【見好志】
丸子井の字の役散しの卯嚢の見りにハ聖嚢にうけし周十郎格子の
つまりそまへ見おとりが仕ましたぞ【こまかく見る人】卯嚢の法人に犬を附しハ
熱心ものこまかいし【理屈云】犬の法人ハチト見んとをが遠やかしませんの
そもの此權ハ大分淨勤をおこし屋敷を治人せしてる所以明むる
のつて敷たいふ屋敷の物有附て無敷の仕ます夫より聖嚢へ越
し長き情の衣裝を今少し沢辺にて無らひ見ないし結もちと
遠ふ故聖嚢の物をつけ山若々の山侍ありせんと赤をうけ長き情で
ありとても出らしぬやうに【きしで】長き情ぐ出らしぬ刈ぎむ長松のね【熱口】
そこらが山名評でつりやしやうねく【見好志】彦にも並来に見せたる松

葉のうんきしがたりきん附て居ましてが何まり見どいやうで和ら
ハ一向交ません【きして】此夫ハ余程苑うんきしがすきと見える【熱口】あに
夫々娘きんを高辺に附るのたろう【見好志】きんぬ姉の蔵分もうんふく
【別取】志かしのきに是中物の二役先評よく山手柄 次の奥行に
もかうをいふ苑やうふるを請ます イヨコチノ年勝屋

長崎屋丈

【別取】男信此所ハ皆きんの山侍うねの時何を仕てもよりも古実
物をとり志らべ見物を感ぶ見せる長崎屋丈ぐ山り拂【初為き】
請く居ましたぞ 此夫が出ぬ間ハ だらも無屋が志まらぬやうに
別取男く評言を彩拂【別取】さきハ中幕実の新に先年秋嚢

座にて大当りを取し去年清上理於風三河隠の場にてふり付は正風を
上理の堂字のやうな仕を透見にお乃世ふ志絶の斎藤扨は大変
丈夫にて家物の自作の和歌もまことに厳格と中々哀はらちま
せぬ［悪口］扨の造具のおりふぞんじんの客の望がちと古物のやう
だら乍ら是は先年［頭取］まあしとかくいうふてハ来尾前を以て記てある
こまり升夫は意評るふり付有松本幸ハ以前月に新升し［illegible］
宮も人目に立ぬやう貞かん前る所有丈ぐはさぞと古物をうぶ
つこのだらぶり与作［頭取］［頭取］以のにもあら世の直りにふり升し［illegible］はぶ
じハ本職［見物左］作ご続の地が見ゆ手織の中形がちと
以組すぎくままぬやうぐ［去して］丈夫にまむはず組おろしの肘が

嵐雛屋丈右どくことも以ての外所ハ扨くめるのだろう［出生見ん］ニヤし
［まつくぶり　きするん人］見しハ文政の頃からと思ふて［去して］いうじを新に諸と見ろとハ余程
とんちの悪いや皆せ［頭取］併し是は中の内の大入と存しハまつ
なかなかもふりませうまことに残念を以ても一夜ってはいつハふいやう
でふり付頭取の奥ハ行ハ役ことをなかなかきん引受ても扨にまんぞくを
せぬやう新升イヨ嵐雛の座敷に長崎屋

おし出やせ丈

［頭取］早り長き皆さん以待うねの相屋丈ぐふり付もおハ来二番目
新の部に新政ぬえ退後の場ぐふり付がまことにて［理屈人］ことし頭取
やし待くもらひませう一体せんこいはまん余り難言つゝましと名

既にまへも申す通り此太夫の身ぶりハ今とつひに歌舞伎芝居離れて仕まする
のおかれねどもあぜいしさがきうらが咄のおれ [頭取] 御尤せハ江戸で上方身ぶり
の初め一座の惣の世界定（サダメ）を仕りまして刻附ましてを場ハ其まゝそハゆく
此太夫の何の都合かまへく取極しまして初日に突（トツ）然出幕と成まして一座
の者もおどろきしまへらいまで身ぶり併しどん帳までハ演ことよする
まで身ぶり故此一幕ハどん帳と以来知レ下をはなまし [ひいき] だら混ぞ此
太夫の道具の物とか見附るが歌舞伎見遣のものハ遠く及ぶべからず
[悪口] 我しが目にハどん帳どこぐハなく丸で席の細工の真似じや
のやうで浅葉出るん地の見世物のまねをするでも無そうなやつを [ひいき]
清栄と以つぞ能の者の業を形故ゆゑ退治の古くに類のなうその大方此夫
ハ夫に見えてものも気をねへ [りうけん] 是しきもチト以来せずして下さい賴む
少し雲のうかりしハ以てが大がきを以て書が画くして此夫ハぬへと雷獣を
同じく見えいるのからしらん何と以てせどん帳の見えてもおもしろ
以せねへ [ひいき] 夫に自夜に花火とハ見もどん帳の形りね [頭取] 御尤
併しう追是中おの七幕に飯とまハ此夫も余程苦心せしと見まする
身ぶり [ひいき] 引ハ頭取の云ふ通り悪口ハ咄でも仕てしらへぬくてくれえ
と以て出さぬくてさ口をくゞいふゆゑに出来るおゝハ古れ斯ハ断云のゝ大立し
[頭取] 何に仕世（故）切… 此太夫も是つ以仕合
萩吉夫
[頭取] 扨是ハ高座の座頭云ふハ櫓座夫の門弟此度初（ハツ）て以目見得の

国立国会図書館　タイトル『出多良目評判記』 請求記号 863-234
ガラス使用

半月歌評判のよい前者夫ぐんり仲 [元ゐき] イヨハ鳴屋の書所

[印刷] 此夫ハ初め出勤せぬつりでありましたが一座の都合にて都合に出勤するやうに成りくまへ何分の仕合し 仕出し物ハ恵徳花七瓶茶屋増ぐんり仲 別かく中仲が此七瓶目ハ是を名人達の勉に宜ハ形を仕残しあるす所此夫もまじめでハとても見物にハ変ぬと思ひ是しぬと見えて家の半月ぐ勤らるしハ大変し 夫に道具の好こ見附菊たん思ひ切りくおうし皇さましくハまことに詰よくんり仲 [元ゐき] うつらへの振ふ下座の相方にてのまん此内が一力の女中達手を打ちつゞ出官をんコーヲチしとまゐし立ちぐらなるをうとが進うけ出る所の掛くまづ土巻へ計をさしまけと見せ手織にて目うしとこふ思附

交ましたぞ [見好志] 手織に三仲の役が附くいましたが うまハ二ッ巴ぐ以ま たかつて志うし此夫ハ三仲の手織にて余程苦心せしとのすぐが悪イ 思附成三仲の役を附る役志斗り出官ミ的を勤ると云ふ事けでも有ハ うゞ言らハ自分の丁寧ぐやらずみ師匠に相撲してよく注意せねぞ 成ませんぞ [宮尺人] 夫に目うねの形ちる遠ふ右九左夫にハチト合ぬやうへ [きらで] 合ふ以目うねでハ九左夫先生見んの下ぐ以何つらへの手紙がよめ ふまてこまつこらう [印刷] 併し斯云ふ大物を見るも有りやつくのあらまし ハまつの手掛し イヨハ鳴屋の書所

仲勢 嘉夫

[印刷] 是ハ前興行分めきしと評判のよい仲勢嘉夫ぐんり仲 [元ゐき] ヲ

すがた評判し

橘　け　た　太夫

頭取 是ハ此度初て出勤の橘瓜太夫が出目見得として出し物ハ大切去の部ニ本朝廿四孝上杉屋敷狐火の場ニ八重垣姫の加役勤ましたが評判よく芸の所作事の評綺麗を織成封清性の心ぶと申の足で是迄の評判ましたぞ 見物 夫合点の上ゝりに合せうぶとをはげ狐火をつかひ軍兵に身の立廻りと云ふ寸方に出来ましたぞ 悪口 諸と申し程なるに前者ハ一向何ぞだ西瓜評判ハふんだらまかふだ太夫せん角の評判も定ずまでとくに鏡敷をあましさ さし出 頭取 うきの至いふせ 見物 木刻しく 此夫ハ中と腕ハ達者よおなる〴〵評判が初ての木な志をとゝ

うち太夫評判ハ此後ぞあてはづう〳〵ニ評判しびん奥行の附腕前をよくしまれるんの上評しませう 一だん 芸こし 頭取 まつ出目見得今上評の方まで所仕合 イヨ橘瓜の若評し

森　の　尾　太夫

頭取 是ハ当座の評えとも中〳〵森の尾太夫と〳〵評判 見物 手と待ける〳〵ま〳〵し 余の者ハぬ程として頭取さんよく評言を評判 頭取 まづ当しおハ大切去の部ニ曲亭翁の作八犬伝富山の場ぐ〳〵評判ぞ 気の人 もし此狂言ハ天保七年の夏頃〳〵木挽町森田座ニ与行せしまでコレし 頭取 狂言の未座ハ比だどでもよい早く評言が出ないのぐ 見物 承知仕ましてまづ本蒔墨一両といふもチト大だをござゐし

かを見幕にて張つ返しハまことにすごき實いふぞ附之【見物左】そな
書れ弱技ハおまへさん形にて此様人ハ交ませせん【悪口】ませまいよげな
をでこしよハッ附しハ九く流りん壽れ者れ心にて悪お達ちが待まししぞ
【宗旨屋】金紙細工れ巻物も以外達摘ひもが附く以ち也が待まへど逃したのぞ
へ【きって】大方當て取く散しおれうも新きなし【ひいき】おどもも此丈と年増
屋丈も立氣れ気めいんと見え以つもまよつく世界がよく極まつた表(せい)
歌や作者をこまらせるものゝ丈成るおひく東てまく合せの道
お様へ女幕に敵役前に立ふ也ふ取散しが見へるものゝにで合
絆以来ハ氣を附くたのミ絆し【見物左】此度ハ高貝菊たん宗っほく
丈成テトあ浅とりが志ましくて志もし火んお浅い交ましくて【頭取】よし

行しハ中村の南座にハ居なかまてハ交ふ浅ぬ此丈此度とてろつしく評と
中でハ合りませんよちみ　イヨ高麗れきまえ美れやの合ゆうやるね

桜屋丈

【頭取】此丈ちどん帳イナ地口にておあじうれ浅尾地根生れ花桜や
丈ぐ合り絆尚度へハ神くれ出勤以自見へ浅れ出し於るの一寿目寿れ
彩に吉例れ当狂対面れ場で合り絆【見物ぎ】ヨし頭取どん帳だれ地口
坂と人喰れ熟れずハ以逃ぎたれハ【きって】履歴を以逃れ又神てれ入浅
まのうつらぬ者うま浅ずやんおせへ頭取【頭取】まつ道具れ好こゝ見へ
附善たんやかろ変てニ方や土器れこゝをおろうりん素へ市川流
れ蓋る渋よ合り絆【悪口】トハそりや何甚負目れおべいるだらふまつ

豊一は市松格子の浴せしも生屋の前のせうでまるし 笠居好 つまらしき
先年ハうまや丈の実の根五帝の時のせうに庭子でなりまばうつりま
せん生りへ工前の役付し案の幕とハチト猪子が遠ふやうへ きじき 彦ら
がどん帳イヤ地口ドッコイ此丈の仕来りし 腕前だらう 場方 板へ蝶を画出
手多の様指ハる庭子を相根に取附しハ兵手に此のせるつもりならん
がねく無理の繁雑に附地口ハんどん見えせうで此一座ぐハ一向交ませ
ん 熱口 地口見えハ此丈の未職ごうぐ仕方ハねへ 地口見物 我らにハ斯いふの
がまうりがよりて大変し 所取 志うし此丈も其座へハ初くの出勤の事有
せうすもまうらぐ 中さかねがもましたのぐ ムりませうが何に以てせ 腕前ハ達
志とれる事有せずて一座を見寄ひ次兵衛にハ交ハ此せるせう新体 元ゐき まゝ所取

の云ふ通り次の替りにハ何ぞ前に教ゆるを待体 イヨコヨノ様屋

客座 山岸丈

所取 依此所客座へ来ましたハ或一方の座所うぐ山岸丈ぐムり体 元ゐき
まゝ待ち居ましたし だらも若手の幕ハ都見いぐハ所るが此丈のせうに実
がなり以前之ゆゑて大以見へ仕ましたサア所取早く評言を新体ぞ 所取 けまば
一事目春の新にもしあハ橋供養 渡邊橋の場へムり体 是附様も余人と
ハ遣いなりとしてよろムりましたし 場方 赤く和景の附しハニカチーフ
を三里紙のせうに附て出しが所まハ大方なつ是の見えならんハチト交
と見ぬ新向サ 元ゐき 一寸多らぬ斯ふるが此丈の山家の宮に志ぶ
以ねサねへ きじき 元とり浩えくも想体のなんあに交ねぎ勢して

御ざりやす〔芝居好人〕私し抔は溜りには通りぬけてさへ感心いたし升

一体此橘供養の場は実にはや及ばぬ芝居でも春の仕組から(せりぬけ)せりぬけ

を見ては「橘供養なのか感心いたし升だけでも秋の衣裳のやうな此

夫から又御出ぬなまめいた〔悪口〕言ふが老功なかなかで老もうかね〔端合〕

ちつとも差支の一体人まぎり一寸あてられ(脱)胴剤を見ておもてへ出ぬ

斗り此元気能く取の先へぶらさがつて居るやうですが最早此丈も老

込んだ故何となく音羽もさびしく真切節し溜の連中は退屈へ出る

でありましたぞ〔頭取〕併し今度は皆それぞれ余人の及ばぬ道者なれ

イヨ老功

玉川丈

〔頭取〕是も今度初下りの藤の玉川丈下りの評今度は(ほうぞ)抔にてお仕立て

使(?)宜居ましてくが今度当地人気ありたのも此座の出勤ゆへ何分此仕

合依也しおいて一寸目春の顔見世江戸操りのでくり評〔ひいき〕ヨウ御出なさ

んでは玉川さんごきんしたえサア頭取さん例の評言を早く申

ぶつつごきんすぞへ〔頭取〕依道真の娘の形附役物形にてよく揃りまし

た当つらの此評ぶりの唄にて若為(?)方業の評判の出〔市川贔屓〕コレ

頭取申し請ふせへそも此仕組みの評言はあらかた見負の市川の此評判を

見ると人を(指)指さるもさいそくするのねへ評言で夫をことをりもなく相

中負らせ(ひいき)の老さむせらなくては当道者の主評せるしく〔ひいき〕イヤ玉

川と云ふうるさ評もきんすかも当道の〔前の市川ひいき〕(何を)まぜつかへしをいひやアかるだ

ゑだと思ふつゞもねへわへし【場中】イヨ成田屋ー【悪口】イヤ鈍を言も也
りハねへどうも森彦がきんまくまへ出ての詩彦が下手すぎるよ【頭取】
左様し 是ハ此丈が好ミの也しおと いふゞハ於を於さぞ御ましゞと
此方成ハまり難役を下すハ気の毒成事らでなづうても住まやう
【ひいき】まだまだ【頭取】次の役ハ何をお家の役を待ます

武蔵屋丈

【頭取】是ハ成川丈の門弟今でハ中々の武蔵屋丈とて人の評判 此度ハ初
て此丈一役人違又ある事を請をも勤られまして只今ハ慶安太平記丸橋
下忠弥其餘の場ぐ人の評判【ひいき】気の毒な世話ながらことを致く森彦が言しし
是又おとろが仕ましたぞ【見て】言まじ 御新をつかひ込て忠弥が城の濠

弥を計といふ義ぞうふ仕方がねへ【芝居好】言城の濠弥を討るとみせし
言せるがけべこづまぬるくまたし成悪る者が仕まして【見功者】城の追剣
様もねく池の中で立まして【悪口】イヤ此丈ハ初心でとを言が言程
あまりを以つてあら此場へのぞし出して来りて辞ル緑を取る忠弥の口を
あまり是ぶち此丈位ひが本役で相を【見て】忠弥の口くつしあふ今少し
うまそうふねどう【頭取】左様し 併し新いふ大相をだでやら心がやつく
のあらましハまへのよ相し 二役二番目秋の部よりしや道まん大間違
葛の葉ふる剣の場ぐ人の評判 前の見り其ハ為の事致く出来まして
【場中】言しもぞと深し手織もまりすぐておうしそうれ出ぐ
又友右衛門も十ト高く込すさまし【見物込】来ル是又の風車立る哉

向し斯いふるは余人の氣のつゝぬ以家あり【きじ記】各合せあらぐ一幕
出すとは經濟し【改正】東あり前にも中あり大あを二役と引更勤
らるしは感心し

山城屋丈

【改正】此丈は初日前分一座の老とも詩兼長ましと此度初く出勤の
山城屋丈ぐ山り体出しおは當時我眉座にて評判の袖日記清雲座
室の場に山り体【場分】信忠ひ御法を此丈を各体元本座にも勤めし
とのを有定めし宣き顔向にて見せらるゝ志らんと思ひ此がこん
ふへんてはふ物が出ましてて一ぶどうのぞこをうしふ所ひまして【其上】そんふ
述懐は此九日も東に改正早く評にうつてり【だ】だらせ十人十勉とや

らで恐ひと云ふ人も可見は又若とほめる志も可ふ【改正】以うまも有やう
でゝり体【恐口】まづ正面に掛し扇子の様姫の図の姿ゝ恐ひ可見でしは
清雲の方ゝ事だし【さ】そうぐ【場分】夫に清雲と胴の内とは言ふ所いといふ
もんじ物ゝは一ぶどう九まがらく志や所ゆりが此ぐ【其上】此場は志じゝ禅
のつとめの相方に雪あるしをうふせ清雲胴の内の留置を事ふ立ゆり有ど
こともすご好ねがうつらぬ相成【かり】【まで】此丈に【さ】ふ見を言ことを意
は見物の方ゝ目先の都うぬのを此男のとき言語屋の新和【改正】東あり
有相ふ朱屋ゝうちは此無利し何に仕せ是ゝ一座の者を見ぬひ十ト勉強
仕ゝ

和橋屋丈

【頭取】此丈も今度初て此一座へ這入ました所評判のよいお稼なされ今
年も中幕まで(?)ちつとは何よりの事じや 夏祭り土仕合の場でおり
升【わる口】ヲヽ待て居ましたぞ 頭取早く評言を聞升【頭取】彼此丈ハ
道具の好き花道掛合(?)心配せしものであるが(?)お升
れまづ当(?)て井戸掘の工合余人の及ばぬ所であらし【場合】夫ハ先生
の新工夫ならず 此丈の本職でござる なるござる【きいた】併し金魚のつると
いゝ替りはあんば芝居の井戸つるべも皆あまりにもないやうを
【芝居好】まつ宗五(?)いゝ(?)しの所あつて団七三婦の土仕合の立廻りを見せ
たる手の形ハ大立し 夫に団七殺しの花道も大仕込みそう見へて升とて
【わる口】又お祭りを見せたるてこまい度々もよい所多く【悪口】コレ 頭取此丈

斗りは見ても見ても見あきぬ【見巧者】見ても(?)何ほど
お気の毒 出すのは【頭取】イヤ左様でござりまする 本倍も出来がよいゆゑ頻りに
りと勘平も中々宜しく まことにおもしろい所あれ 仕次第で今年【わる口】ヨ頭取
此丈を花々しく 初勘(?)くばかりは評判記でハあれ宜しき所を見
てゐねハならぬぞ【頭取】併し又見る所のこゝろ(?)じ 変るハ迷惑な芸(?)に
ほめるのハやめと仕升【わる口】何より此世の目見所合評にはよし仕合
此気をもつをまずもおれ イヨコチノ若井の若形
いろや丈
【頭取】彼此所ハ此傍(?)弟(?)の若女(?)形(?)の花形役者いろやおくり升【わる口】
ヲ待て居ましたこんなを勝つての自ら掛りしもの夏祭長いのを取組

だから併しいつまり長すぎましてサアまく評言を取拝 [政取] 使せしあれ
一番目春の郊は此よりと歌以の言ひいる娘ましんはよぐまといふ居り
鶯鶯は所作変でムリ拝 花道分 東北与四ト 浪花の浪節作うぶをかへ
都て此出衣装も大沢辺にて 都ましいまてよりムリ拝て [娘連] マア目は嵩る社
都ましいぐ以てまねく [連社] アノ鶯鶯が元庫にて此 切が見えますが何でせう
[題口] 可ましいまんづけを大方うもしろがせうけまはまても這人て居ると見えるぬ
[場分] コレ〳〵 政取 最早時分もだいふ御見いやうぐしまよ可とよも二三人居
る所そんなかたらぬ評義をすると待て居ましいは切れねく早く評まうり
なせく [政取] 御あふせは御花で五拝が所作変 花音ぞと云ふて評を下
す所もなかなか都ましいしとゆとでムリ拝 [題口] 御ぶらは長いも見てゆ

うまたは都ましいしでは喰たらねく [きじ取] イヤ沢記しいは可まり 鶯さんな附
ぬぐだんなりをテト 小刀ぬ見せと都ぬさうぐ [場より] そまでたりどりし疾
だ併しコレ。イヤ新いふ 都ましいるは余人は御ようぎぬ 以家ぬ廿 [題口]
そう都ましいしとことまらぬ其いふ 都ましもふ 何とは以先ぬ何ましいさ
ぬさん数では此以がテト鼻もちは此ならぬ [政取] 東ぬし 都やうふ 東屋前
此題口は以来用は取拝 音は所作イナ 蔡評よ ムリ拝 花 併しさんども
まづ評より都方にて以仕合 イヨ可見やは 花形

山口屋丈

[政取] 使此所は以つも身体に東北大物を引 愛 遠く 所評を 愛 遠る 山口屋丈
でムリ拝 [題口] まて待ましいしかふ 題口を 都ましいは場が 事ましいまく 夫者

国立国会図書館　タイトル『出多良目評判記』 請求記号 863-234
ガラス使用

二一天作れ出れらくとでも申しませう 場合 コレ〳〵所取何を力情言を
云ふのぞそんな評ふぶ附物の目を見てくれぬ罪くまれ出して仕舞
あせく 所取 右指あらぶ評言は此以とまと仕ませう 何に仕せ二役氏
所評にて此気に毒し

巻軸

八幡屋丈

所取 此所巻軸にすゑましたは高座に座所うぐ此つも目先を整くこん
物をうまし所らせる八幡屋丈ぐ入り舞最早此丈にて高評判記も打
為に入り舞有お志つうに沈くさん此高評を新舞 元の為 ヨ待て居ました
たし まつ見分余人に評は何を以つこやら少しも耳く入なんぞサア所
取早く評言を新舞だ 所取 はらぐ評言に取撮りませう 結出しれた

中幕に青柳現道風蛙に惜り此場で入り舞今度に此つも此柳で
あく目先をうくく舞巻一面人柳の字をあくましたは 愛 遠ましたて 場合 柳に
字に引続し所がふる恐くに居ましたが何れは道風に学師を高山し
物の志らん 青蛙に此家物にて此手物 先物云 一体 此場ハチト目先が
整りすぎて原んな物に成ましたて 昔が芸居にて此まに仕ても傘を
さしたまて柳に拔く蛙の報酬を道風余念なく 見とましハタト打お
どろ見を橋に早成がむ居んに此ぎし 五を惜るといふ所ふるに蛙
が柳に見初を向く居 居 此ハ居チト 見がぬ所し 拔く夫に傘もつぼめ 見
有舞巻が一向引立ませんぞしたて 場合 イヤ傘をつぼめ出しは今
傘は三ヶ上天気有でなかつて 場合 天気で傘をつぼめ出るにしてこそ

国立国会図書館　タイトル『出多良目評判記』 請求記号 863-234
ガラス使用

19875

国立国会図書館　タイトル『出多良目評判記』　請求記号 863-234

ガラス使用

863
234

国立国会図書館　タイトル『出多良目評判記』 請求記号 863-234

ガラス使用

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『出多良目評判記』　請求記号 863-234